

第 11 回 木の建築賞 木と住まいの建築賞

木のかたまりに住む 設計／網野禎昭＋平成建設一級建築士事務所＋宮田構造設計事務所



【設計主旨】林業の衰退により森林は十分な手入れがされず荒廃が目立つ。節が多く丸みやひび割れのある木材は欠点材と呼ばれ、デッドストックとして製材所の片隅に行き場を失い大量に放置されている。このような低市場価値材を無駄なく活用することができれば、山に戻る利益も増えると考えられる。「木のかたまりに住む」は、わずかな割れや欠点のために市場流通しないスギ製材を屋根も床も壁も、無垢の木材を隙間なく並べた住宅である。木は、軽さ、強度、断熱性、蓄熱性、調湿性、美しさなど、様々な特徴をバランスよく備えている。木をかたまりとして利用することで、多様な特徴の相乗効果を引き出している。低市場価値材を高価な設備を必要とせず建築へ活かす。今まで破棄されていた山の恵みを無駄なく使い、林業に従事する人々が喜んで木を出してくれる社会を目指すことも、木造建築の大切な視点である。(網野禎昭)

【講評】柱も梁もない木の塊を面構造とする構法である。欠点の多い木材の有効活用を狙い、挽板を釘やダボで止め重ねて壁も天井をつくる「ホルツマッシブハウ」は日本では珍しいがヨーロッパでは少ないながらも普及しているという。この建物では挽板に代えて杉の平角材をビス止めして構造体とした。低質挽板の活用に取り組んだスイス連邦工科大学のユリウス・ナッテラー教授と受賞者の網野氏とは師弟関係にあり、当時の経験がこの平角による木の塊に活かされている。

応募写真を拝見したときに、このスケールでは、圧倒的な木の体積に圧倒されるかと思ったが、実際の空間は違った。室内は、天井高に変化があり開口部の配置も適切で、外断熱＋薪焚きクッキングストーブ＋ソーラーの熱供給システムによる床暖房、高性能木製サッシなど、温熱的にも居心地のよい空間となっている。開口部は、木のかたまりを意識した、切りっぱなしの小口のままの仕上がりになっており、軸組工法にはない枠の納まりが荒々しくも新鮮であった。ただし、単純な構法や納まりであることによる施工精度には苦勞がしのばれる。低質木材の有効利用とはいえ、大量の木材を使うならば、次回からは山側を意識した、木の履歴もわかる材料の調達にも挑戦してほしい。(松井 郁夫／選考委員) NPO 木の建築 42 号より抜粋